大正十二年、日本政府は「庚款」（庚子賠款）すなわち義和団事件の賠償金を主として中国の文化事業に使うこととし、まず北京に人文科学研究所と図書館を、上海に自然科学研究所を設置し、日中共同で運営する計画を公表し、外務省対支文化事業部がその準備を始めた。こうした動きが進むなかで、北京大学の沈兼士は同大学を訪れた本校教授大村西崖（大正十四年一月同大学で講演）と協議した結果、急務であるところの古美術保存対策に対して日本政府の援助を要請することとし、美術行政の中枢に居る正木直彦に仲介を依頼したのであった。そこで正木と西崖は直ちに「中国古美術保存調査会」設置計画を立て、彼らが計画推進の日本側代表となるべく、北京へ赴いて沈と更に協議しようとしたのである。対支文化事業部も人文科学研究所設置計画と抵触しない限りは賛成するという意向を示した。

しかし、その後沈兼士は正木や西崖の援助を待たず、北京大学、東京、京都両帝国大学の連合による東方考古学協会（大正十五年六月発足）に与し、また、中国側独自の施策であるところの故宮博物院（大正十四年九月設置）に副院長兼同院文献館副館長となったので、正木や西崖が中国古美術保存問題に関与する余地はなくなった。

⑧ 東台邦画会

大正十四年六月六日、本校日本画科卒業生たちが東台邦画会を組織した。かつて日本画科卒業生の間には東台画会という組織（本書第二巻499～504頁）があり、これは各科を網羅した東台美術会の成立とともに消滅した。しかし、東台美術会は大正五年の東京美術学校改革運動の余波を受けて、何ら成果をあげず雲散霧消した。そのため、日本画科教官および卒業生有志は翌六年、新たに池畔倶楽部という組織を作り、会員の作品展を開くこととした。

この池畔倶楽部の主なメンバーは寺崎広業、川合玉堂、結城素明、松岡映丘、平福百穂、益田珠城、小林源太郎、小泉勝爾、太田義一、篠田柏邦、矢沢弦月、香川東華、田村彩天その他で、大正六年五月に三越で第一回展を開き、その後も時折りデパートなどで展覧会を開いた。最終回の第五回展は同十三年六月に上野松坂屋で開いている。

メンバーの一人であった勝田蕉琴は「東台邦画会の由来」（昭和二年六月一日、二日、『東京毎夕新聞』）のなかで池畔倶楽部について、

> 之は以前のやうな、卒業生全部の集まりではなく、結城、松岡両教授の指導の下に新しい氣分を多分に盛つた、活き活きした會でしたが、回を重ね相當の發表もありましたとは云へ、會員中に社會的地位等の變化が生じ、旁々、後には發會當初の意氣を見難くなりました。

と述べている。このように池畔倶楽部が不活発になったため、卒業生のなかから新たに大組織を作ろうという動きが生じ、そのための懇話会が同十一年六月七日に開かれた。翌八日の『東京日々新聞』はこれを次のように報じている。

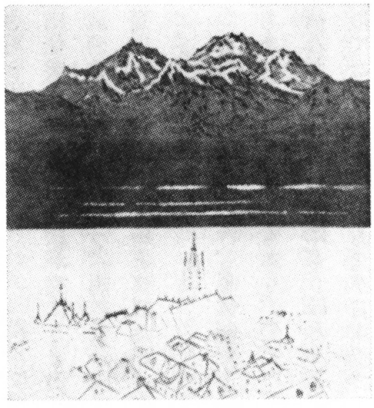
日本畫家の新團結　美術學校派が

美術學校派は東京計りでも三百に餘る日本畫家があるにかゝはらずその團結がなかつたが七日の午後一時から上野美術學校内クラブで最初の團結的懇話會が開かれた　會するものは明治廿六年の第一回卒業生の高屋尚〔邑〕哲氏を初め結城素明、松岡映丘、勝田蕉琴、川崎小虎、蔦谷龍岬の諸氏や今は畫家でなくなつた東宮侍從の堤雄長氏等が百名で發起人で乾南陽氏の挨拶あり各年度卒業者の代表を造ること及び毎月一回集合定例日として七日を定めた　當日は新卒業生をにはかに招集した爲に美校に何か問題が惹起する樣に噂されたけれども平和裡に午後七時解散した

その結果七日会が生まれ、これと池畔倶楽部が合体し、さらに組織を拡大して東台邦画会が成立したのである。『東京美術学校校友会月報』第二十四巻第二号には次のように記されている。

東臺邦畫會の誕生　日本畫科卒業生の間には池畔倶樂部といふ一團體があつて曾ては展覽會に花を咲かせたこともあつたが其後は專ら旅行や講演の方面に活動を起して居た　又一方には七日會といふ一團があつて新舊卒業生が一室に會して互に智識の交換をすることを目的として居たが何れも會員の不斷向上の慾求を滿足せしむることが出來なかつた　そして何時となく此兩者の間には東京在住者を網羅した大きな團體を作つてもつと華々しくもつと有益に活動をして見たいといふ思念が昂進して居た　夫れが結城〔素明〕教授の無事歸朝を祝する歡迎會席上で遂に實現することになり會名を東臺邦畫會と稱し正木〔直彦〕學校長を會長に結城教授〔授〕を副會長に推しこの六月七日から同二十一日迄竹の臺陳列館に其第一回展覽會を開催する事となつて目下開會中である　結城松岡〔映丘〕兩教授の作品を初め會員努力の作が百二十四點陳列された　猶同會は毎年一回展覽會を開く外臨時に講演會、茶話會を催し會員相互の親睦を計〔図〕ると同時に斯道の研讃〔鑽〕に努むるといふ

地方在住の卒業生にして入會希望の向は美術學校倶樂部内同會事務所に申込まれたき由（六月十一日稿）



結城素明筆「湖」大正14年
第1回東台邦画会展出品

東台邦画会は大正十四年以降毎年のように展覧会を開いた。第四回展（昭和四年）あたりから日本画科の新卒業制作も展示に加え、第六回展（同六年）からは解散後の旧新興大和絵会メンバーもこれに合流した。主な出品者は結城素明、松岡映丘、渡辺香涯、川崎小虎、水上泰生、勝田蕉琴、小泉勝爾、望月春江、高木保之助、畠山錦成、岩田正巳、長谷川路可、常岡文亀、荻生天泉、佐々木林風、

狩野光雅、穴山勝堂、野口謙次郎、太田天洋、狩野探道、根上富治、山口蓬春等々であった。

⑨ 大正末期の漆工科の授業

〔「磯矢陽　一九六九年六月十三日　漆工科ゼミ」（未定稿）抜粋〕

漆工の勉強は学校から与えられた課題をやることであった。それは表面加飾の手板教育が主で、一年生の一学期、四月から六月二十何日か迄に五枚が課題となった。初めは笹の葉、次が赤い梅で幹が金の梅の平蒔絵、その次が鱗の線描き、その間に橘、橘は真ん中のまると曲線に大変苦労した。それから門松のように一本立っていて片方が小さい五葉の松の平蒔絵であった。二学期から研出蒔絵を段々と始め、蝶鳥の研出蒔絵をやり、高蒔絵をかなりの数をこなして最後に山水肉合高蒔絵となった。

美校には川之辺一朝のいい手本もあったが戦時中になくなった。戦争の時には漆工科の部屋に兵隊が泊まり、ほかの学校の生徒も入ってきて宿舎にもなった。戦争のどさくさで手本が失われ、惜しむべきことである。

世の中が静かであったのか、確かに時間はあって、実習に取り組む時間はあった。

課題で一番てこずったのは白山松哉の牡丹である。牡丹のたかまでは肉を消して行ったが、上毛打ちという細い線は描いては削りしても結局描けなかった。帝室技芸員の白山先生が筆を選び、丹念に描いたものだから、残念ながら当然のことに思う。

金工の二階で、普通の紙の障子のある畳の部屋で仕事をした。同級生五名が一緒であった。与えられた手板に反発して、なんで若いみそらでこういう古臭いものをやらなくてはならないのかと思ったこともある。立体造形、平面造形といった言葉すらその当時は知らないので、手板に油絵風のタッチで色漆で研ぎ出をやって、鬱憤を晴らしていた。先生が大きな老眼鏡をかけていて、先生の留守の間にその老眼鏡をかけたらうまく描けるのではと思って茶目っ気半分にかけてやってみたりした。

学科では、帝室博物館の高橋健自博士の風俗史が名講義であった。万葉の歌にある風俗を語り、長歌をそらんじて流れるが如く黒板に書いて、先生自ら万葉の歌に酔っていた。万葉なるものを知ることができ、非常に為になった。絵巻にはこういう風にあると現物を見せてくれて、写真版の葉書にして学生に一枚ずつくれた。筆者は誰でどこにあるかも示された。

建築科の大沢三之助博士の家具史も名講義であった。どちらの先生も絵が上手、ことに大沢先生の家具の立面図はうまく、いろんな家具を黒板にきちっと書いた。

図案科の島田佳矣先生が、黒板絵が実にうまかった。図案法を講義して黒板に武者絵を描いてしまう。馬に乗っている武者をどんどん描くのには驚いた。ああやりたいと真似たが、とても出来ないものだった。

学科はこういうことに感銘を受け、単位制でなくて割合に自由に受けて、試験もあったのもないのもあり、先生の講義のノートを提出するだけで済んだのもある。後はもうほとんど実習の時間で良かった。週間制度でなくて、例えば月火が日本画で水曜日が塑造と